

## 『従好談』：翻刻と解題(一)

川平, 敏文  
九州大学大学院人文科学研究院：准教授

村上, 義明  
九州大学大学院人文科学府：博士後期課程 | 日本学術振興会：特別研究員

<https://doi.org/10.15017/1518331>

---

出版情報：文献探究. 52, pp.68-91, 2014-03-31. 文献探究の会  
バージョン：  
権利関係：



# 『従好談』―翻刻と解題―(一)

## 解題

『田舎荘子』(享保十二年刊)の著者・佚斎樗山の存疑作とされ、従来その著者をはっきりしていなかった書に、『従好談』(享保十四年刊)がある。内容は五倫五常の大概にはじまり、儒学諸派の評、仁義礼智の論、誠・性・命・君・臣の説などに及ぶ。すなわち儒学思想を、自己の見解を加えながら平易に説いた絵入平仮名教訓本である。半紙本四巻四冊というスタイルからも、いわゆる談義本に近接した書といえる。

ところで、このたび館林市立第一資料館に保管される「岩田家文書」の諸資料によって、『従好談』の著者が秋元藩江戸家老の岩田彦助(寅齋)であったこと、彦助と佚斎樗山とは年齢・身分・交遊圏などにおいて類似する要素があること、思想的には熊沢蕃山の影響が窺えること、などの諸点について考察を加えることができた。詳細は川平敏文「岩田彦助の人と思想―熊沢蕃山・佚斎樗山との関係―」(『近世文芸』第九八号、二〇一三年)を参照されたい。

ここではその補説として、前記拙稿で触れた蕃山学との関連以外の、

川平敏文  
村上義明

『従好談』の特徴的な言説を二、三紹介しておきたい。

まず「仁」について(巻一)。朱子学では「仁」を「心の徳、愛の理」などと、「うわのそら」なるように難しく説く。しかし岩田彦助は次のように述べる。「仁」という字は「人」と「二」の合字、つまり「人」と「人」―君と臣、夫と妻、親と子、自分と友人などが相和する道をそういったのである。とはいえ「仁」というものは、単に温和慈愛の精神をいうものではない。時には主君の意に背き、その非を諫言するような厳しさもまた「仁」である。「仁」といえば、ただ婦人女子などのように「こゝろよはく、やはらかに物あはれがり、そむかぬうつくしき体」ばかりと思つてはならない、と。

次に孟子の性善説について(巻三)。孟子は、人の性はほんらい善であるという説を唱えたが、これは当時乱世で人心の定まらぬ時代であったので、人々をうまく教化させるために作り上げた説であった。よつてその時代は生板に釘を打ち付けるごとくに快く響いたが、後代になると少し齟齬するところが出てくる。そうして宋儒たちが、この性善説を説明するために、「本然の性」「氣質の性」などといった苦しまぎれの弁解をするようになった。人には根っからの善人もいれば、根

っからの悪人もいる。「本然の性」「氣質の性」などといった要らぬ僉義は差し置いて、人としての道を勧めることが肝要なのではないかと。

以上二件は、彦助が朱子学、ひいては孟子の説をも相対的なものとして捉えていることが分かるものである。

最後にもう一つ、彦助が家臣の諫言について論じている箇所を挙げておこう(巻四)。中国では、家臣が主君へ諫言することは文化として定着しているが、わが国では惣じて、家臣が諫めをすることは分に過ぎたことのように思われ、君主もまたそれに従うのを恥だと思ふ気風がある。よつて諫言する人も稀、またそれを受け入れる主人も稀であるから、「明君も出来がたく、良臣もあらはれず」。そして「是は国風なるがゆへに、力に及ばぬものなり」と。

日本は明君や良臣が現れにくい国であり、またその気風は変えようがないという冷徹な認識は、とかく中国の議論・方法を型どおりに日本へ当てはめようとする当代儒学者の姿勢の非を論じていて、彼の現実主義的な一面を窺わせる。

このように『従好談』は、日本における百家争鳴の時代ともいえる享保期に、儒学にかんする独自の言説を披瀝したのものとして、思想史的にも十分に検討すべき価値があると思われる。本書を翻刻する所以である。

以下、底本の書誌とその改題後印本の書誌について報告する。

#### ■底本書誌

所蔵 九州大学附属中央図書館読本コレクション(読本 I・3 / 享保 14 / イ・1)

巻冊 四巻合一冊。

刊写 刊。

書型 半紙本。縦二二、三糎×横一五、五糎。

表紙 紺色無地、原装。但し後表紙のみ後補。

題簽 「従好談 一」。刷題簽、子持ち枠、左肩貼附、原装。

序文 「従好談自序」——年記・署名なし。

内題 「従好談巻一(く巻四追加)」。巻一内題下に「古希翁述」。

尾題 巻一―なし、巻二―四「従好談巻二(く四)終」。

跋文 1 題名なし——年記なし・「寅齋」

2 題名なし——年記なし・「市南逸民」

刊記 市南逸民の跋文末尾に別筆にて、

「享保十四<sup>己酉</sup>九月吉日

江戸京橋南四町目

和泉屋儀兵衛藏板」。

構成 巻一―序文一丁、目録一丁、本文二〇丁(うち挿絵二丁)。

巻二―目録一丁、本文二九丁(うち挿絵二丁)。

巻三―目録一丁、本文三一丁(うち挿絵二丁)。

巻四―目録一丁、本文二七丁(うち挿絵二丁)、跋文一丁

丁、跋文二丁。

匡郭 四周単辺。

柱刻 「従好一(く四)」。

備考 全体裏打ち。不明蔵書印あり。

■改題後印本書誌

1 『倭俗談』

所蔵 筑波大学附属中央図書館（ロ580／300）。

卷冊 四卷四冊。

刊写 刊。

書型 半紙本。縦二二、八糎×横一六、二糎。

表紙 青色無地、原装。

題簽 「倭俗談 一」。刷題簽、子持ち枠、左肩貼附、原装。

序文 「倭俗談自序」——年記・署名なし。

内題 「倭俗談卷一（〜卷四追加）」。卷一内題下に「古希翁述」。

尾題 卷一〥なし、卷二〥「（欠）二終」、

跋文 卷三〥「（欠）卷三終」、卷四〥「（欠）四終」。

刊記 なし

刊記 卷四裏見返しに、

「宝曆三年癸酉

正月吉日

江戸日本橋品河町

出店四日市 中村多兵衛板」。

構成 卷一〥序文一丁、目録一丁、本文三〇丁（うち挿絵二丁）。

卷二〥目録一丁、本文二九丁（うち挿絵二丁）。

卷三〥目録一丁、本文三一丁（うち挿絵二丁）。

卷四〥目録一丁、本文二七丁（うち挿絵二丁）。

匡郭 四周単辺。

柱刻 「（欠）一（〜四）」。

備考 基本的に、目録題・内題「従好談」の「従好」を「倭俗」

に修訂したもの。

2 『教訓従孝談』

所蔵 筑波大学附属中央図書館（ロ580／80）。

卷冊 四卷五冊。

刊写 刊。

書型 半紙本。縦二二、五糎×横一五、六糎。

表紙 青色無地、原装。

題簽 「教訓従孝談 一（〜五）」。刷題簽、子持ち枠、左肩貼附、

原装。

序文 序題なし——年記なし・「市南逸民」。

内題 第一冊〥「教訓従孝談壹之卷」。内題下に「古希翁述」。

第二冊〥「教訓従孝談貳之卷」。

第三冊〥「教訓従孝談参之卷」。

第四冊〥なし。

第五冊〥「教訓従孝談四之卷」。

尾題 第一・二・三・五冊〥なし。第四冊〥「（欠）卷三終」。

跋文 なし

刊記 第五冊本文末に、

「明和五<sub>子</sub>歲

正月吉日

東都書

中村多兵衛  
植田 又七」。

構成 第一冊／卷一〥序文一丁、本文二七丁（うち挿絵一丁）。

第二冊／卷二＝本文二五丁（うち挿絵半丁）。

第三冊／卷三前半＝本文二五丁（うち挿絵半丁）。

第四冊／卷三後半＝本文一六丁（うち挿絵一丁）。

第五冊／卷四＝一五丁（うち挿絵一丁）。

四周単辺。

匡郭

柱刻 「(欠)一(〜四)」。

備考 第一冊＝『倭俗談』巻一・第一七丁才五行目途中〜最終丁にあたる部分欠。

第二冊＝『倭俗談』巻二・第五丁目にあたる丁欠。同じく

第一六丁才七行目途中〜最終丁にあたる部分欠。

第三冊＝『倭俗談』巻三・第一七丁以降の部分は分冊。

第四冊＝前記参照。

第五冊＝『倭俗談』巻四・第一六丁四行目〜最終丁にあたる部分欠。

## 凡例

一、本文には適宜、句読点、濁点を付し、段落をもうけた。

一、漢字に濁点があり、かつルビの無いものには、ルビの位置に（ ）を付し、ひらがなで読みを記した。

一、字体は通行のものに改めたが、読解上必要な箇所は原字体のままとした。

一、ルビと送り仮名の一部が重複している箇所はそのまま翻字した。

(例…初め)

一、暁字は、「ㄣ」「ㄨ」「ㄨ」等で表し、二字以上は「タタ」「ㄨ」

「ㄨ」であらわした。

一、合字はひらいた。

一、不審箇所には右脇に（ママ）を付した。ただしルビの不審箇所はルビ中に（ママ）と記した。

一、本文・ルビのうち、版木が欠けたと思われる箇所や墨でつぶれている箇所等は（ ）で補った。

一、敬意を示す闕字は反映していない。

一、丁うつりは、「丁数・オ／ウ」とし、原則、底本の丁付に従った。

## 【付記】

本稿の執筆は、「解題」＝川平、「凡例」「本文」＝村上で分担した。

また、底本の画像は、

[http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/handle/2324/411538/yomihon0103\\_kyuhou\\_u14\\_i01.pdf](http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/handle/2324/411538/yomihon0103_kyuhou_u14_i01.pdf)

で閲覧ができる。

なお、本稿は平成二五年度科学研究費補助金・基盤（C）「江戸前期の思想・文芸における老荘思想受容についての研究」（研究課題番号：23520229）の成果の一部である。

## 本文

### 従好談自序

夫人道ノ之書、有<sup>リ</sup>聖經<sup>一</sup>、有<sup>リ</sup>賢伝<sup>一</sup>。而後註解發明、不<sup>レ</sup>可<sup>ニ</sup>勝<sup>テ</sup>計<sup>フ</sup>也。於是、後世能通<sup>ニ</sup>其事<sup>一</sup>、能達<sup>ス</sup>其意<sup>ニ</sup>。可<sup>レ</sup>謂<sup>ニ</sup>之<sup>ヲ</sup>聖學ノ全備<sup>ニ</sup>而已。然<sup>ド</sup>モ唯<sup>々</sup>恨<sup>ラ</sup>クハ、以<sup>ニ</sup>其說多端<sup>ナル</sup>ト、与<sup>ニ</sup>不<sup>ニ</sup>自省察<sup>一</sup>、而其惑不<sup>レ</sup>少カラ矣。窃<sup>カ</sup>ニ按<sup>ル</sup>ニ、於<sup>ニ</sup>聖賢ノ之教<sup>ルト</sup>人<sup>ヲ</sup>、与<sup>所</sup>ニ以<sup>ニ</sup>自<sup>ラ</sup>行<sup>フ</sup>者、少<sup>シ</sup>ク有<sup>ニ</sup>差別<sup>一</sup>乎。泰伯ノ篇<sup>ニ</sup>、子ノ曰、民<sup>ヲ</sup>バ可使<sup>シ</sup>由<sup>ラ</sup>之<sup>ニ</sup>、不<sup>レ</sup>可使<sup>レ</sup>知<sup>ラ</sup>之<sup>ヲ</sup>。章ノ之註<sup>ニ</sup>曰ク、若<sup>シ</sup>曰<sup>ハ</sup>「聖人」(序・オ)不<sup>レ</sup>使<sup>メ</sup>民<sup>ヲ</sup>知<sup>ラ</sup>、則是、後世朝四暮三ノ之術也。豈聖人ノ之心<sup>ナ</sup>ランヤト也。蓋夫聖人ノ之所<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>教<sup>レ</sup>人者<sup>ハ</sup>、正經<sup>ナ</sup>リ也。所<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>自<sup>ラ</sup>行<sup>フ</sup>者<sup>ハ</sup>、權<sup>ト</sup>与<sup>レ</sup>中<sup>也</sup>。正經<sup>ハ</sup>可<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>教<sup>レ</sup>之<sup>、</sup>而權<sup>ト</sup>与<sup>レ</sup>中<sup>不</sup>能<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>教<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>也。豈朝四暮三ノ之謂<sup>ナ</sup>ランヤ乎。吾從<sup>ニ</sup>壯歲<sup>一</sup>有<sup>ニ</sup>疑<sup>ヒ</sup>于此<sup>一</sup>。今既<sup>ニ</sup>過<sup>ニ</sup>古希<sup>一</sup>、欲<sup>レ</sup>罷<sup>シ</sup>ト不<sup>レ</sup>能<sup>。遂</sup>從<sup>ニ</sup>吾<sup>ガ</sup>之所<sup>ニ</sup>好<sup>ケン</sup>、而猥<sup>ニ</sup>以<sup>ニ</sup>倭字<sup>ヲ</sup>述<sup>フ</sup>素旨<sup>一</sup>。其卷數四。如<sup>ニ</sup>其罪<sup>ヲ</sup>何<sup>カ</sup>セン。」(序・ウ)

### 〈書き下し文〉

### 従好談自序

夫人人道の書、聖經有り、賢伝有り。而して後註解發明、勝て計ふべからず。是に於いて、後世能く其の事に通じ、能く其の意に達す。之を聖学の全備と謂ふべきのみ。然れども唯だ恨むらくは、其の説多端なると、自ら省察せざるとを以て、其の惑ひ少なからず。窃かに按ずるに、聖賢の人を教ふると、自ら行ふ所以とに於いては、少しく差別有り。泰伯の篇に、子の曰く、民をば之に由らしむべし、之を知らしむべからず。章の註に曰く、若し聖人民をして知らしめずと曰はば、

則ち是、後世朝四暮三の術なり。豈に聖人の心ならんやと。蓋し夫れ聖人の以て人を教ふる所の者は、正經なり。以て自ら行ふ所の者は、權と中となり。正經は以て之を教ふべくして、權と中とは以て之を教ふること能はず。豈に朝四暮三の謂ならんや。吾壯歲に従ひ、疑ひ此に有り。今既に古希を過ぎ、罷んと欲すれども能はず。遂に吾が好みけん所に従ひて、猥りに倭字を以て素旨を述ぶ。其の數四。其の罪を如何せん。

### 従好談卷一目録

#### 小序

五倫五常大概 七条

学派學術 二条

仁 三条

姑息 一条「(・オ) (空白)「(・ウ)

### 従好談卷一

#### 古希翁述

凡天地の間、よろづ物の中に、人を以て貴しとするは何故ぞなれば、人はひとの道をおこなふゆへなり。ひとの道とは仁義礼智信なり。人と生れても此五つをおこなはずしては、何の貴き事もなし。鳥けだものにもなんぞことならんや。人としては、かならず人の道をおこなふべき事、もちろん也。」(・オ)

一、ひとの道をおこなはん事、かざく事多くして、とりしめがたきやうにきこゆれども、左様にはあらず。畢竟、君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友たゞ此五つの間より外はなし。朋友といへば、朝夕まじはり、かたりものする斗をのみいふにあらず。君臣、父子、夫婦、兄弟にあらざる外は、みなく朋友のたぐひなり。此五つの間に、彼仁義礼智をよくおこなへば、君と臣、父と子、夫と婦、兄と弟、其外すべて、ひととひと相「二・ウ」やわらぎ、よろづなしおこなふべき事ども、さゝはりなくとぐる事なり。

一、仁といふは、まづ大方をいへば、彼五つのあいだ、あいし、したしむところなり。其五つの間、たがひにあいし、したしみて、にくみ、へだてざるときは、其間、相和らぎて、さかふ物なくして、むつまじくなるなり。其あいし、したしむ事、たゞ外より見聞ばかりの事にはあらず、こゝろの底よりあいする事也。それに「三・オ」も、親疎厚薄、しなぐのしだいある事なり。大概まづかくのごとし。一、義といふは、彼五つの間におみて、それぐにつめて、かならずなすべき事、かならずなすまじき事、かならずいふべきこと、かならずいふまじきことありて、其ほどぐにつめて、よろしき処あり。其よろしきところにしたがひておこなふをいふなり。まづぐあたましかくのごとし。「三・ウ」

一、礼といふは、いにしへの聖賢、天地しぜんの道理にしたがひて、それぐのほどよき処をかんがへて、立たまふ法度規模なり。凡尊

卑の高下、親疎の厚薄、たちみふるまひ、問答の言葉つかひなどの、こまかなる事にいたるまで、彼五つの間におみて、法則、かねあい、もやうのしかた、ある事なり。其法にそむかず、其かねあひにしたがひ、其しかたをたがへずまもるを、礼といふ也。惣じて、人をばうやまひ、「四・オ」をのれはへりくだる所、礼の根本としるべし。

一、智といふは、何事も、をのれしるところあきらかにして、物の理非をよくわきまへ、くからぬをいふなり。彼五つの間に、道をおこなはんにも、それぐのよろしきあぢはひをのみこまず、よきところ、あしきところの分別わかたずしては、其道をおこなふ事なりがたし。かるがゆへに、がくもんのはじめに「四・ウ」智をみがく事を専要とす。智の事におみて、まぎらはしき事も有。大ていは右のごとし。

一、五常といふ時は、仁義礼智信の五つなり。信をば、まことと訓ず。これは仁義礼智のごとく、それぐのしなあるにはあらず。其四つものものをおこなふに、外見外聞の為にするにはあらずして、こゝろのそこよりなしおこなひて、うらおもて打ぬきなるところを、信といふ也。

一、ひとのしなをいへば、君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友「五・オ」たゞ此五つのみなり。其間の道をいへば、仁義礼智信たゞ此五つのみなり。しかれば、五つのあみだに五つのものをおこなはんには、かざくおほくて、とりしめがたきとはいふべからず。しかも、人々

の身に其理は、むまれつきであるところのものなれば、是をおこなはん事、なんぞかたからんや。道にこゝろざしあらんひとは、すこしもゆるがせにすべからず。もし又、いまだそのこゝろざしあらざんば、いそぎおもひ立べし。「こゝろざしといふは、たとへば、まとを射るに、わが身をろくにして、こぶしをさだめ、あの的を、とこゝろざして射るに、あたらざといへど、遠からぬがごとし。おのれを正しくして彼五倫の間、此五常をおこなでは、人にてはなし、とおもひきわむるときは、たとへ十分になははずとも、かやうにこゝろざし立てある時は、人の道にはちかづくべし。そのこゝろざし、すこしもたゆまず、息たへ目をひしぐまで、とおもふべき事なり。」(6・オ)

一、五常の名目をたてゝいへば、ことがましきやうにきこゆれば、それらは常体の人は及びがたき事などゝ、おもひあやまる人もあるべし。かつてさにはあらず、はなはだ手ぢかき事也。今時俗人、たとへ一文不通のひとにても、彼五倫の間に、此五常を日夜に五六分ほどづゝは、もちゆるなり。此五常をはなれば、其五倫の間、一日もたちがたし。其五常を五六分ほどづゝ、日夜おこなふといひながら、がくもん思弁にちからを「6・ウ」もちいず、よきおしへをうけざれば、其五つの物、あるひはすぎ、あるひは及ぬもありて、ほどよくそろはず。そろはざるのみならず、大にたがひゆくほどに、かへりてよからざるやうになりゆき、終にはとりうしなひ、しそこなひて、

其道にかなふひとまれなり。おしき事也。

又はじめより此道をこのまぬ人の風俗は、五常の名目にて、いふひとあれば、あな物くさく、おこがましきがくもんだてかな、とてわらひの「7・オ」しるもあり。或は、がくもんは、くすし、出家などこそすべけれ、われらは武士なり、儒者にあらず、がくもんは、わが家職にあらず、世にがくもんしたるひとは、人がらあしゝ、などゝあざけるもあり。或はまた、まことにがくもんすれば、文字をよくよむ。いかさまがくもんは、したき事なれど、かくのごときいそがはしき職分ありて、そのひまを得ず、などゝいひ、又元來われらには痞積ありて、書物をよみ、さやうの事に氣「7・ウ」をつくせば、つかえおこりて、しよくがすゝまぬ、かしらがいたむ、などゝ云もあり。或は、りはつ弁口なるは、我身を一廉おもひあがり、其学問したる人と我等と、何事をしたりとも、ちともおとらじ、などゝぢまんするもあり。いかさま、さやうにそしり、あざけりて、もちひざるも、ことはりなきにしもあらず。中華のむかし、めでたき世のがくもんはしらず。今時の学者、まことのがくもんに、かなはぬゆへなるべし。」(8・オ)【繪】「(8・ウ)【繪】「(9・オ)※図一

されば種々の学派あり。まづ朱子学と称するは、人に善言善行ありても、朱子程子の言にもるれば、一事もとりあげず、程朱の注解語録に明白なるあやまりありても、それをばいひかくし、まぎらかし、いかなることにて、程朱の筆にもれたる事をば見もせず、聞もい

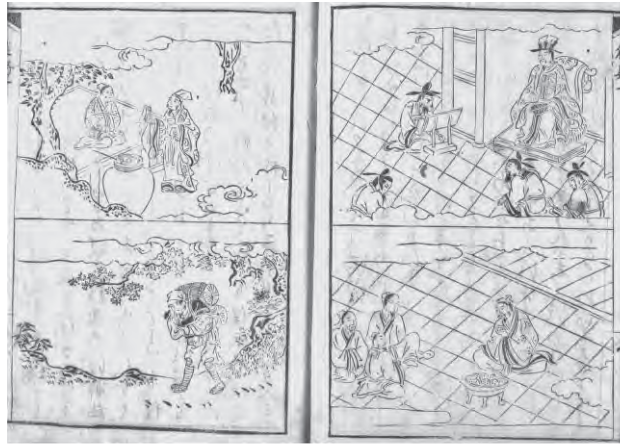


図 1

れず、程朱の評せぬ書をば手にもとらず、人の見出し、発明したる事も、程朱の説にたがへば、異説と称して、耳にもさらに聞入ず。」  
 (9・ウ) 程朱は孔孟の統をつがれしなごのゝしる。また陽明派と称するは、朱氏の学はもとにしたがはず、それは支離の学とて皆ふだ葉の末にてとるにたらず。心学としてこゝろをもつばらに執行するは、其根本なり。陽明の心学こそ聖学の道統なれ、とあざける程に、す

へたの学者、たがいに目をいからかし、齒をくひしぱり、終には一座にもゐざるほど也。彼法家宗、念仏宗の中のあしきに、さも似たり。誠に「10・オ」にがくしき有さまなり。又発明家ありて、諸儒の説を批判し、其非をあけて、をのれが説をたて、其家を起さんとするが故に、他の説に元来これなき意味をいひくわへ、それにとり付てそしるといへども、をのれが立る説も、聖賢の本意にたがふ所あれ

ば、聖賢の語をのれが説に合せて、異議を云くわへ、とかく己れが説に引入むとす。

是等はいかなる心ぞや。かやうに諸学者のよからぬ事のみ多き故、学問せぬ人に嘲られ、「10・ウ」いひわけもなく、赤面に及ぶべし。

これらはみな学問のとがにはあらず、学問する人のとがなり。

すべて学者にも、品々の風有中に、一とをり儒者風といふ学者あり。何事を見ても、皆むかしの儒者の言に引合せて、それは誰が是といひしほどに是也、これはそんぜうそれが非といわれしほどに非なり。其事は誰々も終に評判せぬ故、是非をさたすべからず、などいひて平生の物語、あいさつなどにも、熟字、連綿字を「11・オ」漢音にとなへなどする故に、文字にうとき人はきしらず。されば人をみちびく用にもならず、わが身斗おもひあがりて、さしてとりあぐべき言行もなし。是は文学にくり付られたる儒者風といひつべし。書をよみ、物をおぼへたる斗にて、我身もよからず、人をもみちびかねば、詮なき学問なるべし。

一、いにしへ、聖人上に有て、世を治め給ひしにはすへた迄も、道有事を知る故に、さほど名高人にては「11・ウ」あらねども、いにしへの人の一言一句にも、やさしく手厚き所多し。末世になりては、りこん発明なる人も手厚き所はすくなし。孔子は下にましましぬれば、したがひ学ぶ人も多くて、其道をくはしく教へ給ひしかば、能聞請て伝へたる人も多しとなり。次第に世みだれ、うつりかはり、年

久く成ては、いつとなくとりうしなひて、くはしくは相伝はらざる  
とみへたり。只論語斗ぞ、孔子のおしへ給ひし有さま、今もみるや  
うなる所多し。然ども、「12・オ 論語にのせし孔子の教へも、或は  
其国、其所に中し、或は其人に中し、或は其いきをゐに中して教  
へ給ひし故、前後おなじからざるおもむきも有。いかさま、さやう  
これ有所が 則 聖人なる所なるべし。

しかるをすへの世に註解せしには、聖意にてはあるまじとみへた  
る所多し。よくく了簡有たき事なり。今はたゞ宋朝の註解にてな  
ければ、学問はならぬやうに成行事は、はなはだしきあやまりなる  
べし。其註解の中にて、実の聖意をたづね出したき「12・ウ 事に  
て有。其註解には、なづむまじき事かと思へり。およそすへの世に  
は次第々々に風俗あしくなり行ぬ。まして聖賢には 弥遠くなり、  
よくおしゆる人もなく、又したひ学ばんとおもふ人もすくなき故に、  
いつとなく道は甚おとろへ、只世をわたるかしこさ斗ぞ、いやま  
さりぬ。今におゐても、其いにしへをおもひはかり、こゝろざしを  
たて、おしへを請たくおもはば、聖賢の仰られし言と、行はれ  
し跡と、くわしく書々にかきのせ有事なれば、其言行「13・オの真  
偽の間、其根本の意味をよくく了簡し、遙にむかしの聖賢のむ  
ねをおしはかりしりて、今の我身のかゞみとすべき事也。其おしは  
かる事も、文字章句のすへにかゝはりては、中々知がたし。聖賢の間  
答をも其時の其身、其国所の、其いきおひをよく思ひ弁へ、それ

を我身にとりもちゐて、時々剋々けだいななく、事々物々につゐて、心  
をつくし、くふうをなさねばならぬ事也。さやうにおこたりなく心  
に入て思弁すれば、年わかき時、中年になり、「13・ウ 老年になるま  
では、いくたびも了簡うつり替り、きのふ是と見しも、けふは非  
となり、初非と思ひしも、後は是となる事多し。

しかれば学問の道、極りはなき事にして、息たへ、目ひしぐをか  
ざりとつとむべき事也。まことに其成就といふ事は 甚ありがたき  
事なれども、しかれども、くだんのごとくたへまなく執行して、と  
しをかさねたらんには、おぼろげにはおしはからるまじきにもあら  
じ。

さて其こゝろざしの「14・オ おこたらざるやうにする手段あり。  
まづこゝろざしをたつる事は、よろづの事ども、みなく義理の上に  
てなさねば、人と生れても人にはあらずと思立て、つとめ学ばんに  
は、大方おこたりは有まじき事なれども、耳目鼻口、四支百骸のよ  
くにひかれては、其こゝろざしたゆみおこたりて、終に其こゝろざ  
しをうしなふ事多し。それはいかなる故ぞなれば、彼耳目鼻口、四支  
百骸の運動所作は、皆氣のつかさどる所なり。其氣をやしな「14・ウ  
はざるが故也。其氣をよく養へば、其氣のび出てちゞまず、よつて  
よく其こゝろざしをたすく。其志し、氣にたすけられて、志  
し弥立て、猶又其氣を養ふ。其氣を養ひては、猶又志をたす  
く。かくのごとくたがいにもちあひゆけば、志しもたゆまず、氣も

のび出るなり。是大将正しくして、士卒をつかひ、士卒よく帰服して、大将をたすくがごとし。彼運動所作と言は、めぐりうごき、はたらきなしおこなふを云也。耳にては「15・オキク、目にては見る、鼻にてはかぐ、口にてはいふ、手にてはとるぞ、ひくぞ、足にては立ぞ、行ぞ、身体におめては、くるしむぞ、やすきぞ、かくのごときたぐぬなり。人の欲といふものは、皆これらの間よりおこる故に、それくゝにつみて、それくゝの氣をやしなふ事也。

其それくゝのやしなひやうは、筆に書つくしがたし。みづからよく了簡有べし。大概をいへば、何事もむつかし、とてすておく時は、なしおこなふ事なし。さらばとてとりかゝれば、「15・ウ人のする事、大方ならぬ事はなきものなり。たゞせぬといふくせもの有故にならぬなり。よく了簡せば、みづからしるべき也。又学問し、古書を見るにも、文義になづみぬれば、今吾朝に生れながら、中華のいにしへのごとくあらでは叶はざるやうにおもひて、しみてから流にせんとおもふは、甚あやまりならん。道を行なはん事は、其根本をよく得心して、其国、其人、其時、其いきをみにしたがひて、おこなふべき事也。」(16・オ)なづむべきにはあらじ。

爰に又、学者の病あり。おのれ文を学び、よろづの文字もよみやすく、ふるき事どもを知り、かしこき議論評判などもおぼへ、智もひらけ、物しりに成ては、文字にもうとく、いにしへをもしらず、智のひらけぬ人を見ては、甚目下に見くだし、脚下に

あなどり、おのれは高ぶり慢ずる故に、人のためにも多きなく、其間には種々あしき事ども出来るなり。さやうの学者の心底所行をひそかに「16・ウ)かうかゞひみれば、人をすくひ、おしへのための用なきのみならず、中々欲ふかく、名聞名利にかゝはる斗にて、彼文字にうとく、知職のひらけぬ人よりも遙にをとれり。まことに、さやうにあざけらるゝも、ことほり也。不智の人のあしきよりは、はなはだ罪ふかし。恥かしき事也。

一、仁義礼智とならべて云時は、大かたは前に記せしごとく、仁と云は人を愛し、したしむ所をさしていへども、もつばらにおしくるみて仁といふ時は、「17・オ)をよそ人道の至極を云也。其仁を解するには、諸儒の説あり。今しばらくそれをばさしをきぬ。それもつばら仁と云は、人已相對する所の道の名目なり。其故は、人の品をいへば、君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友、此五倫より外はなし。其五倫の人々とおのれと相對する間、相和してへだてなく、人とおのれ一つのごとくならば、何か其間にさゝはるべきぞ。彼忠孝別序信、をのづからよくおこなはるべし。かるがゆへに、仁の字は二人(17・ウ)相對するていといふ事を知べきなり。さればおのれ君なる時は、臣は人なり。おのれ臣なる時は、君は人なり。をのれ父たる時は、子は人なり。おのれ子たる時は、父は人なり。夫おのれなれば、婦は人なり。おのれなれば、夫は人なり。兄おのれなれば、弟は人なり。弟おのれなれば、兄は人なり。凡天下の人々、己れに対しては、皆

人なり。此ゆへに仁と云は、人已相對する間の道の名目也。かくのごとく仁の字を覚悟せば、むつかしき事はあるまじ。こゝろの徳、「(18・オ) 愛の理など」云になづむ時は、何とやらん、うわのそのやうにて、手に入がたし。

一、しからば、其人已相對する所、いかやうにして一の如く相和して、忠孝別序信をば、おこなふべき。其所よく思弁すべき事也。其手段は、何事につけても、人有事を知つて、おのれ有事をわするべし。是其大根本也。大かた人々、おのれ有事をのみ知りて、人有事をわするゝがゆへに、人と己れと相へだゞり、二つになるを以て、君にむかひても「(18・ウ) 忠をつくさず、臣をつかふにも礼義をみだし、親に對しても孝をおろそかにし、子を養ふにも、まことの慈をなさず、夫婦の中正しからず、兄弟の間、相よからず、人にまじわりてもまことすくなし。此趣をよく了簡工夫して、つとめ行なふべき事なり。

ある人のいはく、仁義礼智は人々の心にそなはり有所を、孟子説れしかば、それをもつて仁義礼智は心の徳なり。此四徳は、人の性中にそなはり有所の理なりと註解有を、それにしたがはず「(19・オ) して、人已相對する間の道の名目といひては、彼註解にそむきたる異説なり。ましてかやうに筆にのする事、はなはだしかるべからずとぞ。まことに淺学不才の身なれば、其こたへはせずしてやみぬ。但しひそかにおもへり。凡孔子の仁を説給ふ事、おのれひとり斗の事に

はあらず、皆人とおのれと對する所のみ説給へり。人の字、有もあり、なきもありといへども、とかく人に対せずといふ事なし。論語の中に、おのれたゞく欲して人をたて、「(19・ウ) おのれ達せまく欲して人を達すといひ、己が欲ざる事は、人にほどこす事なかれといひ、人にくみして忠といひ、仁智につゐては人を知る、人を愛すといひ、仁をする事、己れによれり、人によらんやといふ。又、人の字、なきたぐひは、己にかつといひ、其ことしのぶといひ、大賓にあひ、大祭につかふまつるといひ、諸侯を九合するといふたぐひなり。人の字、ありてもなくても、皆々人に対する事斗にて、おのれひとりのことにあらず。よくたづね見るべし。」(20・オ)

しかれば、仁は心の徳、愛の理などいひては、相手もなくて空理つかむがごとし。義礼といへども、皆々相手がありての事也。まして仁と云もの、相手あらずといふ事あるべからず。さりながら此等ら趣は、只われらのひとり覚悟する事なり。かるがゆへに此書を見る人々、皆々其旨をこゝろへられよといふにはあらず。孔子の言葉につゐていわゞ、人は何ともいへ。我はわが好む所にしたがふなり。それゆへに此書を名付て「徒好談と稱す。」(20・ウ)

一、人と己れと相對する間に仁を行なふ事、たゞ我ひとりおこなふのみにあらず。上に立ひとよりしていへば、我をとゝのへ、國を治め、天下を平かにして、人々をして各その所を得せしめ、人々をしておのゝ身をやすうさせしむることは、仁を行なふ大功業の至り也。



図 2

也。忠とは我心をよくみがき出すまことなり。これを心をつくすと  
 もいへり。心は外よりは見へずして、をのれひとり知る所なる故に、  
 われとわがこころをよくおもひかへり見て、ことばにのべ、身にこな  
 ふ事、皆々こころのうちにおもふと、たがはぬやうにする事也。若そ  
 の「22・ウ」言行と我心とおなじやうにあらざる時、我とわがこ  
 ろをかへり見、とりなをして、心と言行とたがはぬやうにする事也。  
 言行のあしきは云に及はず、言行、道にかなふといふとも、こころ

それ故に、聖賢君子も此  
 事をのみ一大事とはなされ  
 し也。さらば其仁を何とし  
 て執行せんとなれば、まづ  
 我身を能おさむるにあり。  
 おのれを修る事よくく  
 おもひ「21・オ」【絵】「21・ウ」  
 【絵】「22・オ」※図 2 弁まふ  
 べし。其中に間近き手段あ  
 り。第一には忠信を主とす  
 るにあり。又忠恕と云事有。  
 且又己が欲をすくなふす  
 ると云事有。是等の事ども  
 は、はやくおもひ立べき

それにたがへば、内外齟齬す。皆いつわり也。よくとり直してた  
 がはぬやうにする事也。これを心をつくすと云。大学に意を誠に  
 すると云事は、物ごとにつみてわが心のおこり出る所におみて、み  
 づからかへり見て、内外たがはぬ所を云なり。是則本心を誠に  
 「23・オ」するのしかた也。

信と云も、すなはちまことにして、いひし言葉にたがはず、身に行  
 なふを云。但しいひ出したる言葉を、是非ともにならず身にお  
 こなふと云事にはあらず。それゆへに、言に出す事は、かならず我身  
 に行なふ事にあらねば、いひ出さぬやうに、よろづをつゝしむべき  
 事也。かくのごとく、よく執行する時は、終には内外そろふまじ  
 き事にもあらず。忠信とまとめていへば、則まことなり。主とす  
 ると云は、此忠信のまことを我身の柱らに「23・ウ」して、よろづの  
 事を忠信のまことにてつらぬき、たもつやうにする事也。かくのご  
 とく、まづく我心行をつくしきわめずんば、人に対する道は行な  
 ひがたかるべし。但し、次第をいへばくだんのごとくなれども、わ  
 れはいまだおのれに忠信を主とする事、成就せぬ程に、人にまじわ  
 る道は行なれぬと云事にてはなし。おのれにまことをつくす所、す  
 なはち人にまじはる所也。おのれをよくする事、最早、是にてよし  
 と云かぎりは「24・オ」なき事也。おもひ立日より、終に息たへ、目  
 ひしぐまでも、執行する事也。かやうの所をよく思慮して、書物の  
 文義にならず、一偏に落入らざる所、専要なり。むかし曾子の修行

に、人の為にはかりて忠あらずや、朋友とまじはりて信あらずや、と一日にいくたびも我身をかへり見られたるは、まことに大賢の、忠信を以て仁を執行し給ひし所也。よき手本なるべし。

又忠恕と云は、忠はちからを用ひず、をのづから人の事(24・ウ)も、をのれが事も、相かわらずへだてなき所なり。件の曾子の執行の熟したる也。恕とは、おのれが心を以て、人の心をおしはかる也。我好む事は、人もこのむ所をおしはかりて是をすゝめ、わが嫌はしき事は人もきははしく、好まぬ所をおしはかりて是をあてがはず、かくのごとくになしめてゆけば、つゝみには人の事、我が事、をのづから相へだてざる様になるべき也。是則、仁に至る修行の道すじ也。さやうにおしかりしりても、何としても人の「(25・オ) 事とおのれが事へだよりやすく成行 たがるは、つねのならひなる故に、其所にはちと過たるほどにちからを入れて、人有事をばよく〜おもし、をのれ有事をば打忘るゝほど、つよく勤めざれば、なるまじき事也。然れども、さやうの所もあしくなづみては、親疎につゝて厚薄 有所をとりたがえぬべし。其処の差別、過不及あらざる様に思弁、肝要也。其所、其勢ひ、其人、其義、其礼有べし。一ぺんに泥むまじき事也。

又五倫の間に「(25・ウ) 仁を行はんに、甚さまけをなす病有、是を欲といふ。をのれに此欲多ければ人の事はかろくなり、我事ばかりおもく成て、終には人ある事を打忘れ、おのれ有事をのみお

もふ様に成行なり。さありては忠恕もをこなはれず、仁にちかづく事かならずかなはずして、五倫の間あしくなる也。其故に、つねくゝをのれが欲をすくなふして、其病を出さぬやうに保養ある事肝要也。人としては耳目鼻口、四支百骸につゝて、其欲はかならず「(26・オ) 有事、聖賢もつねの人も同じ事也。されば、道をおこのふ人は其欲に勝、道にいたらぬ人は其欲にほださるゝ也。彼義礼智も、仁とならべてはいへども、畢竟此三つは仁をたすけ、なすもの也。義あれば、仁其よろしきところを得、礼あれば、其仁位を正し。智あれば、其是非の分別たがはず。然ば、此三つの物、相助け相たもつ処よりして、仁の道全く行はれ、五倫の間相和して、くだんの大

功業もよくとぐべきなり。」(26・ウ)

一、爰に又、姑息といひて、仁によく似て、はなはだ仁にそむくものあり。姑息とは、しばらくいこふと訓ず。しばらくいこふとは、もとよりこしらへて、むかふの人のこゝろ、ことばにさからはぬやうに、たくみてしたがひ、其事の始終の是非をば思はずして、只よき人とおもはするてい、又こゝろよはくして、まことの義理をしらぬたぐひ也。さやうによろづ只人にさからはず、和はらぎしたがひて、心よき体の人をば、能人がらなりと、人々ほめ立る「(27・オ) 事なり。左様の人がら、こしらへてなしても、また生れ付もとり、心よはくても、皆々ほねなきものゝごとし。其おもむきをたとへていわんに、小児、甘くむまき物をのぞむに、其能程をしめしあてが

はず、或は其悦ぶをうれしがり、或はなきさげぶをむつかしがりて、きげんをよくせんがために、あまくむまき物をひたとあたへぬれば、つゝには小児の脾胃いたみ、大病出来る。小児は智慧もなく、さやうの物とらする人にはよくなつく。しかれども、」(27・ウ

其大病、治する事あたはざれば、小児もあはれなる事になりゆき、其あたへたる人も、大成なげき出くる事也。かなしき哉、小児に美食をあたへずして其子をそこなひ、おのれもなげきいでくる事は、大かたの人も知る事なるに、人にむかひて姑息の甘口を用ひ、さしあたりて能人とはおもはずれども、つゝにはおのれが徳をそこなひ、人をもよからぬ方へみちびく事をばさとり得ず。あはれなる事どもなり。今時人がら」(28・オよくこゝろよき人と称するには、大かた彼姑息にて、其身の為にへつらふ人也。温和慈愛に似て非なるものなり。

聖人は是に似て非なるものを、はなはだにくみ給ふなり。善者と人に思はれんとてこと葉をとりつくるひ、顔色をこしらゆるをば、好言令色は仁すなしといましめ給ひ、又其所に住て誰に交り、いづれにいであひても、さても能人かな、と誰にもかれにも一様にほめたてらるゝ人をば、郷に愿なるは徳の賊なりとはちしめ給ふ。孔子の、子貢にしめし給ひしは、」(28・ウ 善人にはよく思はれ、悪人にはあしく思はる善なりとなり。まことに其ほむる人、善人ならば、ほめらるゝ人は善人ならん。其ほむる人、悪人ならば、ほめらるゝ

人は悪人にて、そしらるゝ人は善人ならん。これらは其志し同類なれば也。

又聖人の言に、剛毅木訥は仁にちかしと也。此人がらは物ごとにつき、あひしらひすくなふして、正直に気づよくて、ぶつきれにあらしからぬ体也。よろづににべすくなく、云べき事、なすべき事には会釈なき」(29・オ故に、よりそひなく、人がらよからぬ様に人々いひもし、おもふもの也。彼巧言令色、郷に愿なる輩の、まことすくなき人にくらぶれば、内外へだてなき実ある人がらなれば、仁にちかしとの給ふとみへたり。かるが故に、仁と云者は、彼姑息にあらず、やはらかにうつくしき体のみにはなき事、分明也。但かくいへばとて、かた趣につらくせあしく高ぶりて、こわ口きれ口などする事にては、さら／＼これなき事也。たゞ内外相違なく、まことなる」(29・ウ べき事也。

こゝに又少し紛はしき事有。謙とて物ごとおのれをしりぞけ人にゆづり、謙とて己れはへりくだり、人をうやまふ。此等は人の善徳也。其ゆづるも、へりくだり敬ふも、それ／＼の程能事あり。其ほどにたらぬも、過たるも皆嫌ふ事也。されば君にてもあれ、誰にてもあれ、いさめ教訓をなす時、いかに道理有とて、会釈もなく、かしらより事がましく、いひかくる時は、さきの人、聞入ざるのみならず、却てよろしからざる事に成行」(30・オ べし。かるがゆへに、事により直諫もあるべき事なれども、第一諷諫をよしとする也。

惣じて、いさめ教訓する時は、気色もことばも、従容として相やはらがざれば、事ゆかず。かやうのさかいをよく思弁あるべき也。凡わが心の底に温和慈愛あれば、わづかの詞、少しの色にも人はしたがふ事也。かくのごときたぐひは、しな多き事なり。筆を贅せずとも、よく了簡有たき事也。仁といへば、只婦人女子などのこゝろよはく、やわ(30・ウ)らかに物あはれがり、とかく物にそむかぬうつくしき体のやうに、おもひあやまる人もあらんなれば、かくのごとく書のするなり。」(31・オ)

### 従好談卷二目録

義礼智	四条
用力三品	一条
人師	一条
誠	二条
覽書	一条(一・オ)
徳	一条(一・ウ)

### 従好談卷二

一、事々物々の、其よろしき所を行なふを義と云事は、よろづ物ごとのうゑには、それづかにならず、かくあらでかなはぬ所有。かならずかく有べからざる事有。其善事をかたくとつて是をまもり、其悪

き事をかたくまもつてよらず、約をたがへず、言をはず、よろづの事、其道理にしたがひておこなふ事也。かるが故に、其おもむ、一々筆にはのべがたし。或は一たび主君とたのみぬる上は、其主、「(2・オ)主たらざれども、まさに臣の道を守り、其難にのぞんでは命をすつる類も有。或はかくのごとき恩を得たり。今報ぜずんば、いつをか期せんとして、命をもすて、または、しがたき事をする類も有。其外、晋の鄧伯道が、我子をして、弟の子をたすけし類も有。又其人そこに有合ざれども、目の前とかわらぬ様になしおこなふたぐひも有。何事もそれづかのよろしき所を思弁して、まもりおこなふべき事也。義の字を按ずるに、善我の二字を合て」「(2・ウ)我を善くすると云意ならんか。

一、礼は自然の道理にかなふ所を、いにしへよりさだめ置れし法度の規模なり。其法度の規模にたがはぬ様に是を守りて、身に行なふ事也。但し、其国、其時、其人、其いきをひある事也。其おもむきによくしたがふべき事肝要也。いかに礼なればとて、中華のいにしへ行なひしごとくに、今吾朝にて、かならず全く行なはんには、かへつてあやまり多かるべ」「(3・オ)し。それづかの能所にしたがひて、一ぺんにはなづむまじき事也。

ある人のいわく、日本の人は稟受うすき故に、三年の喪は行ひがたし。むかししみてつとめし人もありしが、病出て身を亡ぼしつる。さやうの国風故、むかし賢き人、日本人の体をよくはかりて、期の



図3

商シヤカの、主人シヤウジンなき人、年たけたる子コか弟テイか有アて、其職シヨクをいとまませたらばなるべし。しからば稟受ヒンジュのうすきばかりにはあるまじ。此所ココの風故フウコなり。

且カツマタ亦モ、今イマの人ヒト、心喪シンソウと云事コトをいへども、それもまた「4・オまことシヤウコの心喪シンソウにはあらず。まことの心喪シンソウは、喪服モを着キせず、慟哭ドウコクなどの礼レイを略リヤクする斗バカリなり。されば、今イマしめて三年喪ネンノモを行ハシはん事は、しかるべからんや。父祖代々フソウダイ、受来ウケキタりし禄ロクを辞ジし、子孫シソンをやしなふ

喪モとさだめ置ツカれしならんとも也ナリ。愚按ウツアンするに、人としては、まさに三年の喪モはかならず行ハシなふマき筈ハツもちろんなり。然シカレども、むかし「3・ウはしらず、今の時トキにおゐて、士農工商シノクコウシヤウの中ナカにて、士シにおゐては三年の喪モ、法ホウのごとくには決してなるべからず。まづ第一ダイ、其主人シヤウジンゆるさず。かるがゆへに、しゐて行ハシはんには、其禄ロクを辞ジし、流浪ルラウの身ミとならずんば、成ナリがたかるべし。もし農工ノウカウ

事成ナリがたくて、それらをしてくるしましめん事コト、いかゞあらんや。其是非ゼヒ、弁ワキマへがたし。およそ礼レイは、じねんに有事アルコトとは少しちがひて、其法ホウを立たたるもの故ユに、いにしへ老子ラウシ莊子シヤウジなどは、礼レイはこしらへたるものにて、人々ヒトこころ「4・ウの底ソコより出イでたる誠マコトにあらで、皆みないつわりなり、とおもへるなるべし。それ聖人セイジンの礼レイを第一ダイにしたまふ事は、礼法レイホウと云者イフモノは、天下テンカ国家コツカを治ササむる大切ダイセツの道具ドウグ也ナリ。此道具ドウグなき時は、天下テンカ国家コツカを治ササむる事コト、かならずかなふべからず。たとへば斧ノ斤マサカリなくして木キを伐キんとし、鋤スキなくして田タをたがへさんとするがごとし。禮レイの字ジを按アずるに、示體シテイの二字ニをあわせたる者モノか。示シはあらはし、しめす意イ也ナリ。我身ワガミになす法度規模ハツトキボを「5・オ【絵】」(5・ウ【絵】)「5・オオ付マゴ※図3 外へあらはし、しめすの意イ也」

智チの事コト、人と生ムれては、良知リヤウチと云者イフモノそなはり有故アルコトに、生れ子ウマを捨ステて置キても、いつとなく知恵チエづき、おのづから人の事コトを見ミならひ、聞キならひ、大オていの事はあきらめしり、良能リヤウノウとて其良知リヤウチの知る所シヨをば、大かたには身ミになしおこなひて、大かたの人ヒトとはなる事也ナリ。それに生れ付ウマてかしこきも有ア、おろかなるも有ア。かしこしとて其良知良能リヤウチリヤウノウばかりにては、大切ダイセツの用ヨウにはなり「5・ウがたし。おろかなりとてすつべきにあらず。次第シヤダイに成長セイチャウするにしたがつて、人欲ジン私欲シヨクと云、しゆくゝの欲ヨクにひかれて、七ナの情ジョウとりゆくにかた寄ヨリ、かたまり、生れ付ウマたる良知良能リヤウチリヤウノウも、皆みな其情欲シヨクのつかわれものとなるなり。かるがゆへに、人はかならず学問ガクモンして能教ノウキョウへを請ウケ、能事ノウジになるれば、其知

る所、あきらかになり、する事も其知る所をよくふみおこなふなり。  
学問教解はもちろなり。能事になれならふ事、大せつなり。〔6〕  
才サイ能士ネイシによく養ヤウひ立タテられて、つねに能事ネイジをのみ見ならひ、聞キなら  
ひぬれば、いつとなく人品ジンピンのくらゐよく成ナル也。農工商ノウカウシヤウのしわざの事  
のみ見聞ミキならへば、何となく、其人品ジンピン、位クラキよからず。朱シュに交マれば  
あかく成たぐひ也。孟子モウシの、斉国セイコクの太子タイシに感カンぜられしも、ことはり  
也。人はそだち所トコロによりて、人品ジンピンたがひ有ア事也。

さて其養ヤウひたつる所、をしへ立タツるには、種々シュジュウのおもむき有アとい  
へども、まづ大がいをいへば、幼少ヨウショウの時より、人の〔6〕道ミチと云者イフモノ  
に、志コノコトしのおもむく様ヤウにみちびきて、よき事をば見ならはせ、き  
ならはせ、手なれさせ、かりそめにもあしき趣ソムキの事はいましめ、  
なれさせず、をのづから道ミチにこゝろざしおもむくやうにする時は、  
つゝには善人ゼンジンとなるべからん。然シカれば、生れ付ムマたる良知良能リヤウチヤウリヤウは、  
をのづからあれども、善人悪人ゼンアクニンとわかるゝ所は、学ガクもんとおしへとな  
らひに有ア事也。されば子のあしく成は、過半カハシはおやのあやまりなり。  
もし年トシたけおそくおもひ立タテ〔7〕またりとも、おのれが智チをおしひ  
らんには、まなぶとならひとに有ア事也。まなぶと云は、書物ショモノを多く  
よみ、文作ブンサクり、詩作シサクり、文字モンジを多く知りて、書シヨをよむ斗バカリの事にはあ  
らず。文作ブンサク詩作シサクもならず、書物ショモノなどすらゝとよめずとも、が  
くもんならぬにてはなし。もつともひろくまなびて、つゞまやかに  
とり用ヨクるほど能事ネイジはなけれども、それがかなはぬ身ミは、只タかな書ガキな

りとも、聖賢セイケンの言行ガンコウの趣ソムキをのべたる書ショならば、〔7〕みづからも  
よみ、人によませてまき、聖賢君子セイケンクニンのこゝろゆき、ことば、行ギョウ  
ひの、其時トキ々トクによく応オウじたる意味イミをよく了簡リヤウカンして、今の我身ワガミにと  
り用ヨクゆれば、遅オソクく思オモひ立タテて、あしくつきたるならひも、をのづから  
能ヨクなるべし。それよりうへは、いかほども執行次第シユギヤウシダシに、智チあきらか  
に、行ギョウひもよく成ナルべし。

まなびてつき、おしへを請ウケてつき、ならひて付ツキたる知チは、彼五倫カノゴリンの  
間アイダ、五常ゴウヤウの道ミチにかなふ事也。いかに人、道ミチにおもむかん〔8〕オ  
にも、智チくらましてはなりがたし。かるがゆへに学文ガクモンの道ミチ、智チをあ  
きらかにするを、さきとする事也。もちろん智チをあきらかにする事  
は、おこなひをよくせんがためなり。くだんの如ゴトくとしをかさねて、  
をこたりにくまなびぬれば、いつ智チがひらけたりといふしるしはみ  
へねども、次第シダシに物モノごとのきへ、あきらかに成ナリ、おこなふ所もをの  
づからそれにならぬ也。たとへば一事ジ一芸ゲイにとりからきにも、初ハジ  
は何ナニに取付トルツクべき様ヨウも〔8〕おぼへざれども、其所カノコトを堪忍カンニンして、月日ツキヒ  
をかさね、年トシを経ヘぬれば、いつとなく其事コトあきらかになりゆき、つ  
ゝには手に入イル様ヨウになる事なり。学問ガクモンの道ミチも是コトにおなじ。只タ々思オモひ立タツヒ  
より、息終イキタヘ目メひしぐまで、たゆまぬ所トコロかんやう也。凡ヨクきらゝと  
こんなる人は、智チあきらかなりとはいわれず、よく明らかに  
る人は、はじめより何事ナニの義理ギリも能通達ヨウツウダツする故ユヘに、何ナニが明アカらかな  
りとも見ミへずして、かへつて愚グなる〔9〕オ人ヒトにも見ミまがふ程也。

よく／＼考へ知べし。

聖賢君子のひらけたる知は、たとへば四方正面の座敷に居るがごとし。何方より何事をもちきたつても、埒のあかぬといふ事なし。鏡に物のうつるがごとし。まなびてやう／＼物の義理にうつる人は、たとへば蚊帳の中にあるがごとし。聖賢君子のあきらか成やうにはなけれども、大かたのさかいは見分るなり。また字問思弁もなくて、只りこんなる人を、或人た「(10・ウ)とへて、酸漿のごとしと也。一方、口のあきたる方の事は、板に水をながすごとくなれども、さらば義理の入口みて通ぜぬといふになりては、真くるなり。只一方の口ばかりとしるべし。

智の字を按ずるに、知明の二字を合せたる者か。知るところあきらかなる意か。但し、智の至極とする所は、人を知るに有。およそ人として智なき時は、物の用をなさず。かたちは人にて人にあらず。智なければ、ともし火なくして、夜ことをなさんとするが「(10・オ)とし。何事をもなす事あたはず。しかれども智をたつとしとする事は、行ひをよくせんが為なり。しかるに、智の有人はつね体の人の云もし、なしおこなふ所もどかしく、見あなどり、おのれが智を自慢して、つね体の人の云事する事をば、大かた用ひず。其智有人にも、いろ／＼のくせ、さまざまのすききらひ有て、其きらふ事をば、はなはだをしのか、すきたる事には、まよひてざとらず。

惣じて大事をしそこなひ、大儀をしそんずるは、不智なる人には

まれにして、「(10・ウ) 智有人に是多し。不智の人は、初よりする事あたはざれば也。孟子は、智にくむ所は鑿するが為なり、といわれし也。鑿するとは、ほりうがつ意也。禹王の、洪水をおさめ給ひしは、水のおのづからながれゆくべきいきおひの理にしたがひて、みちびき給ひしとなり。此事、智を用る手本なるべし。智と云ものは、はなはだ重宝大切なる者ゆへ、人としては智をひらく事、第一なれども、其用ひやうをほりうがてば、かへつて大なる害ある事、

はなはだ「(10・オ) 不智の人よりもをとれる也。此所の分別、肝要也。孔子の、門弟子と問答には、仁の事のみ多く、且礼を説給ひし也。仁礼はおのれをおさめ、人をおさむる道の至極にして、すなはち前に段々記せしごとくなるべし。孔子の時、礼の法度、漸くみだれんとする故に、其所をすくはんとて、礼を厚くおもく説かれしならん。孟子は礼を説れし事すくなふして、只仁義々々とならべてをしへられしなり。孟子の時の諸侯の中には、君父をそこなひ、兄「(10・ウ) 弟相うばひし輩も、子孫も有て、しかも其家々大きに成、とみさかへて有中へ、礼をくはしくとかれては、さし合事多し。いづれの家になりとも、王道を引こし、天下をやすふなさしめたくおもはるゝ故に、当時のさゝはりになる礼の事は多くはとかれず、其うへ乱きはまり、戦国なる中に、仁とばかりいひては、人々ちとゆるく、まわり速く覚ゆべしとて、仁に義をそへてとかれしならん。是は其時勢をはかられたるな「(10・オ) するべし。しかれば仁義礼いづれをさきに

し、いづれを後にすべきにはあらねども、其時、其いきをひは、あるべき事ならん。

一、凡こゝろざし有人、ちからを用ゆべき品三あり。三とは何ぞ。心と言と行と、此三なり。よろづの事、此三つのもの相より相なす所、肝要也。いかに心におもふ所よきとて、言と行とたがひては、見るべきなし。いかに言にのべたりとも、心と行とたがひては、とるにたらず。いかにしおこなふ所よくとも、「12・ウ」心と言と違ひては、其行つゝに行はるべからず。心も言もよくても、行ひ悪くば何をかたらん。心も行もよくても、言違ひぬれば、大なるあやまちも出来らん。言も行もよくとも、こゝろ其おもむきにたがひぬれば、内外齟齬す。偽りと云者也。然故に、よろづの事、此三つ相そろふやうに、よく執行有べき事なり。其うち心をもつぱらとして、執行する事有。行ひを専要にして執行する事有。言を第一とする事有。

其心をもつぱらにする事は、「13・オ」おそ道を行はんに、心は人身の主なる故に、其主のおもむきむかふ所よき時は、言も行もをのづから其主につれられて、よくなる事なり。もし言あやまり、行たがふとも、こゝろをたちかへりてあらため、日月をかさね、としをつもれば、言行もよくなるべし。言行のあしきも、大かたはこゝろのあしきにひかれの事を。また心をたづねずして、行ひを専要にする事は礼法なり。礼法の事、こゝろにはおもし「13・ウ」ろからず、

すゝまずとも、是はまさに人たる者のかならずなすべき事なりとて、其法のしかたにしたがひ初めば、ちからを入れてつとめまもりぬれども、いつとなく其事にならひなれて、常行となり、はじめむつかるく、すゝまざりしこゝろも、後にはいとやすくなりて、行ひとこゝろと、へだゝらざるやうに成ゆく事也。是は行をつとめて、こゝろをさそひひくしかたなり。或はこゝろより行を引出し、「14・オ」或は行ひよりこゝろをさそひ引事、よくく思弁あるべき事也。

又、心も行も、たづねずして、言を第一とする事は、或はかりそめに人と出会、或は他国へ使などにゆきて、他の人にまじはり、会合するには、つねのわがこゝろもおこなひも、其所へは出あわず、只其所、其時、其事につめて、まさにしかるべき言をつくしぬれば、其事もよくなしとげ、主君の名をもあげ、其身の忠義のほまれもあらはるべし。「14・ウ」しかれば心言行、おのゝ要所有べき事也。とかく此三の者、何れをもよくして相より相そろふ所、肝要なり。

一、人の師となる事は甚かたし。浅学、小智、短才にしては、ならざる事もちろん也。しかりといへども、人としては、かならず師とならでは、かなひがたき事あり。いかにとなれば、いかにいやしき身にても、妻有、子有。或は弟、甥、姪のたぐひ有。すこしおもきは、奴婢、従者のたぐひ有。「15・オ」是等は皆、教をなすべき也。教る時は師のたぐひ也。其おしへん事、まづをのれよく学びな



図 4

らひて、其趣をもつておしへみちびく事也。おのれ学びならはずしては、何をもつてせんや。第一、子のあしく成は、生れ付も有といひながら、大かたはおやのあやまり多し。其おしへやう、心をもつておしゆる

も有。身を以ておしゆるも有。色をもつておしゆるも有。言語をもつて教ゆるも有。此中にも言語を以ておしゆるは、「(15・ウ)上品にはあらず。其人有、其勢ひ有、其時有、其所有。よくく了簡して、それくにまさにしかるべき所をおしへて、一偏になづまざる事、肝要なり。言語を以て教ふる所は、孔子の、門人と問答し給ひし其意味をよく思弁せば、寔に及ばぬ事といひながら、至極の手ほんたるべし。

一、まこと云事、品有。にせものにあらざるをも真と云、虚にあらざるをも実と云、をのづ(16・オ)からいつはりにはあらざるをも誠と云、言をたがへず、ふみおこなふをも信と云、自然とまことなるをも孚と云、約をかたく守るをも諒と云。文字をわかちいへば、大かた此趣なれども、文字はたがひに用ゆるも有、又此外にまこと訓ずる字もあまた有。或は心と言行とたがはぬよりいひ、或は言と

行とたがはぬより云、まこといへば、まづあらまし右のおもむゆへ、善事之有。然れども又、悪事につゐても善悪にかゝらぬ事にても、「(16・ウ)こゝろの中よりふるひをこしてなす事、いふ事も皆まこと云也。

中庸に、誠は天の道なり、是をまことにするは人のみちなり、といへり。誠は天の道と云は、凡天地の間の事、皆々自然に成行て人力を加へざる事、是しぜんのまことにして、すなはち天の道也。これを誠にするは、人の道と云は、人も亦自然の理にしたがひて、おこなふ所は天の自然なると同じ理り也。これを誠にすると云にて、人のちからを入る処と知べき(17・オ)【絵】(17・ウ)※図4なり。人の其自然にしたがふ所をかるき事にていはゞ、春来りてあたゝかになれば、冬よりかさね着たりし衣服をうすくする。夏になりて暑いたれば、ひとへなる絺綌を着す。秋の冷氣到来すれば、袷物を着、うす綿にうつる。冬の寒に及べば、又かさね着す。是等は至りてかるき事にして、いかなる人もをのづからなす事なれども、是則天の道の、自然の誠にしたがひて、これを誠にするのたぐひなり。しかる時は、「(18・オ)それ天は高くして、かみにありて万物を覆ひたすく。地はひきくして、下に有て万物をのせ揚。是則天地自然の位、其間の万物、自然の誠にて流行する所なり。人として其まことにしたはんには、君は高し。かみに有。臣はひきく、しにも有。若夫、君とならば、万民を覆ひたすくべし。若又、臣とな



図5

したがひて、これを誠にする事は、人たるもの、かならずつとめはげみ、おこたらず、たゆむまじき事也。是にそむかば、人と生れても、人にてはあるべからず。

一、誠は天の道、これを誠にするは人の道といへば、何とやらん、おこがましくきこえて、かるからぬ事にて、聖賢ならでは叶ひがたき事のやうに「(19・オ)おもふ人も有べけれど、かならずしもさやうにはあらず。をよそつね体の人も、おのれひとりする所におゐては、皆まことのみなり。いかんとなれば、痒ければ抓は、まことを行なふ也。かゆしと云は、まことの言なり。飢て食するは、まことの行ひ也。飢たりと云は、まことの言也。飽てくらはざるは、まことの行ひなり。飽たりと云は、まことの言なり。暑ければうすく着、寒ければあつく着、あつしさをむしといふもみな、まことの行ひ、ま

らば、重きをになひ、遠きにたへて、其おゝひたすく人のために、つとめはげむべし。是天道のまことなるをとり請て、「(18・ウ)人はまことにする所、則人の道也。此理を能々推て見る時は、よろづの事、此理にはづるゝはなし。天の道に

ことの言也。其他「(19・ウ)よろづの事、立居ふるまひにいたるまで、ひとつとしてまことにあらずと云事なし。此時は、我心と行と言とをわかち多らぶに及ばずして、をのづから心術、言行、ともになす事也。いかさまにも天地の間に出来る人なれば、天地自然に流行するごとく、人もかく有事にや。其身ひとりする事は、かくのごとく皆まことなるに、人に対しては、其まことかつてすくなふして、いつはりのみ多き事は何故ぞや。我身斗の事の、まことな」(20・オ)るごとくに、人に対してもまことならば、何をか云事のあらんや。五倫の間に第一に行はんとする仁におゐて、まことなくんば、いかゞはせん。それ仁はまづ人を愛し、したしみ、にくまざる事なるに、おもては愛する体をなし、したしむ趣にもてなし、にくまぬ言を出すといふとも、こゝろの中まことならざれば、其仁の体、皆偽なり。かやうの所は、大かたおのれが好む所の利のためにする事なり。おのれが欲より起りて「(20・ウ)【絵】(21・オ)※図5 仁をこしらゆるもの也。それ仁者の其言行にあらはるゝ温和慈愛の体は、実におのれが心に有ものよりおこりて、自然と外へあらはれたるものなり。しかれば、今其誠を求め得べき手段を、よく思弁あるべき事也。誠と云者、こしらへ出さんとするといふとも、こゝろの底よりおこらぬ誠は、なりがたかるべし。

かるがゆへに聖賢の、人を教へ給ひしは、其心をば、まづたづねずして、法度規矩をたてゝ、孝と云はかくの「(21・ウ)ごとく、忠と

云はかくのごとし。是々にたがへば孝にあらざ。忠にそむくとおしへ給ひしなり。まなぶ人も其むねをよくうけいれ、つとめならひ、なしもてゆけば、初めはしにくくて、すまざりしも、後に熟すれば力を用ゆる間もなく、了簡をくはゆるに及ばずして、をのづから君に向へば忠にかなひ、父母にあふては孝を行なふ。五倫、皆かくのごとし。其仕習ひて、をのづから其義に叶ひぬる時は、則真忠の「22・オ人、真孝のひととなるべき也。是はならひて誠となりたる所なり。まことをもとめん事は、大むねかくのごとし。或は何事もこゝろと云もの第一なり。こゝろよき時は、言行はかならずそれにひかれてよくなる、と一偏に定むるも、又心はたづぬるに及ばず。言行こそ第一よと極むるも、皆是過不及也。とかく一偏にこゝろへたらんには、あやまり多かるべし。只其人、其国、其時、其勢ひあるべきなれば、忠孝別序信といへ」(22・ウ)ども、其程能所を多らばん事、専要ならん。まことと云もの、わが身の上斗の事には、くだんの如くはなれぬものなれば、みづからよくかへり見たらんには、知らるべき事ならん。

一、聖人の事を記したる書を見る事も、こゝろへあるべし。孔子の言は、みな後世の手ほんにならざるはなしといへども、それも亦其人、其所、其時、其勢にしたがひ給ひし故に、定規をの給ふ所も有、程度をのたまふ所も有、其浅深厚薄、品々有。(23・オ)かるがゆへに、其本をたづねずして、詞のすへになづむ時は、孔子の意味にたがふ

事多かるべし。論語中におもても、さやうの所を能了簡あるべし。末世の注解には、こゝろへがたき事ども甚多し。

爰にみづからこゝろみたる事あり。述而の篇に、子曰く、甚哉、吾をとりたる事。久哉、吾また夢にだにも周公を見ず、と有。其注解の意にいへるは、孔子さかんなりし時、其こゝろざし周公の道をおこなはまく欲し給ふ。かるが故に「23・ウ)もしくはね覺の夢にも見給ひつらん。とし老ておとるへ、道もおこなはれず、其心もなくなりて、くだんの夢も見ず、とてなげき給ひしとなり。此注のとをりならば、孔子は七十二か三かの時、おはり給ひし程に、此語は七十二、三歳の時の語とみへたり。それにつき、おもひめぐらし見るに、此注はなはだいぶかし。周公は孔子の時より七百年程以前の人なり。それをゆめに見たきとも見らるゝ事にあらざ。たとへゆめに逢ひ給ひたりとも、夢と云ものはあとさき」(24・オ)なきものなれば、正しき用には立がたかるべし。あひ給ひたりとも、七百年以前と孔子の時とは時勢もちがひぬべし。

しからば何の問答、何の物がたりあらんや。近年に死たる人にて、も、いきて有人にても、夢に見たきとも見るべきにあらざ。もし今、としわかき輩の、人をいたづらに恋ひしたひ、其人をわするゝ間もなくば、ゆめに見る事も有べし。そもく孔子は聖人なり。あふてもせんなき事なるに、夢にあはぬにつけて、とし「(24・ウ)のより給ひしを、さやうになげかるゝ事あるべきにしもあらざ。臨終に及

ひ給ふまでも、其志(シ)はたゆみ給はじ。我(ワレ)ことし七十二になりぬ。わかき時のごとくかけはしり、飛(トビ)はねする事は、かなひがたけれども、こゝろさしにおゐてはすこしもたゆまず。我等(ワレタ)こときの者にてさへ、かくのごとくなれば、孔子(カウシ)聖人たり。云(イフ)に及ばざる事なり。しかれば彼章(カノシヤウ)の意をひそかにおもへり。甚(シ)矣、吾(ワガ)おとろへたりとは、としより、身のおとろへたる(25・オ)事にてはあらで、吾道(ワガミチ)のおとろへたりと云意(イ)なるべし。久矣(キウイ)とは、周公(シウコウ)より七百年なり。夢にだにも周公(シウコウ)を見ずとは、年久(トシヒサ)しくなりて、次第(シヤイ)々々に周公(シウコウ)のなしかれし道(ミチ)も、孔子(カウシ)の時には(二)とくくうせはて、其道(ミチ)を見給ふ事なし。まのあたり見給はぬのみか、夢(ユメ)の中にさへも、さやうの事見ぬぞ、との給ふなるべし。夢(ユメ)にもとは、まのあたり見ぬ事(ハナハダ)の甚(シ)しきをいへるならん。此章(シヤウ)、注解(チユカイ)のはなはだおもしろからざる故に、しるす者(モノ)なり。」「(25・ウ)孟子(モウシ)の書を見るにも、猶(ナラ)こゝろへ有べし。當時(タウジ)は乱世(ワラセ)戦国(セウコク)也。リコウ弁舌(ベンゼツ)のみはびこりて、おのくまげをとらじとする風俗(フウソク)なり。孟子(モウシ)は聖人(セイジン)の道をよく得られて、何(ナニ)とぞ其道(ミチ)を一たび引おこしたくおもはれつるまゝに、よろづの事を他の人(タ)にいひまけては、其おしへ立(タチ)がたき故に、其程(ホド)につゐて説(トカ)れしかば、おのづから其言(コト)かどだちて、まどかならず。人(ヒト)こゝをいへば、かしこへぬけ、人(ヒト)かしこを立(タツ)れば、こゝの理(リ)をもつて(26・オ)くじきたる所多し。其時にとつては、かみすじほどのすき間(マ)もなき言(コト)なれども、後世(コウセイ)になりて、しりぞひ

てひそかにあんずるに、すこしはさへはる所有(ソウユウ)とみえたり。かやうの所をよくく分弁(ブンベン)あるべき事也。惣(ソウ)じていにしへより書物(キョモノ)に虚言(キョコフ)多し。其事は、漢(カン)の王充(ワウチュウ)がくはしく論(ロン)じたり。事長(コトナガ)き故(ユヘ)に記(キ)す事あたはず。とかくむかしより聖人(セイジン)といへば、人倫(ジンリン)をはなれたるやうにおもひもし、いふ事なり。聖人(セイジン)と云も人なり。」「(26・ウ)只(タ)よく仁義(ジギ)礼智(レイチ)信(シン)が手に入りたるもの也。徳と云は、人(ヒト)と生(ナマ)れ来り、心身(シンシン)ともに人の人たる所をうけ得てそなはりたるも、まづ徳と云べし。天地(テンチ)の間(アイダ)のいきものの中に、人もまたはだか虫(ムシ)にてあれども、彼五常(カフゴウ)の徳(トク)有て五倫(ゴリン)正しく、みだれざるを以て貴(タツ)きものとするなり。徳の字形(ジキガウ)を以てたづぬるに、直(チヨク)心(シン)を行ふ意味有。直心(チヨクシン)を行なふと云は、をのがこゝろに受得たる所を、すなはち我身(ワガミ)におこなひすましたるを云。それにも(27・オ)浅(セン)深(シン)厚(コウ)薄(ハク)、しなぐのかわり有。其人(チンキ)のむまれ付てよくする所におゐては、其事(コト)につゐて出る所の知識(チンキ)はおのづからすぐれたる所有(ソウユウ)。しからば何事もさやうにあるかとみれば、只其事(コト)ばかり也。其よくする事、生れ付てよくするも有、ならひがつもりてよくするも有。よく成たると云にいたりては、皆(ミナ)同(ドウ)じ事なり。それにも又、人々(ヒトヒト)の得手(コト)と不得手(フエテ)とある事也。生付(ムマレツキ)の、温順(ワンジュン)にして柔和(ニウワ)なる体(テイ)の人(ヒト)は、をのづから人をにくまず、人(ヒト)こゝにむかひて、こゝろあしからぬ体(テイ)なるは、仁徳(ジニ)ある人也。しかれども、只其(タ)ごとく、人に人よく、こゝろよきとて、仁者(ジニヤ)など云にはあらず。是は其人(チンキ)の生付(ムマレツキ)の得手

なり。又、質直シツチヨクにして勇悍ユウカンテイ体に生れつきたるは、人のたえがたき事をもよくこらへてなし、人のしがたき所をも、能ヨクこれをなしとぐ。云べき事、すべき事には身をミわするゝ体有テイは、義徳ギトクある人といひつべし。是も亦マダ、全マツタき義者シヤと云にはあらず。是其人の「(28・オ) 得手エテたる所也。およそ柔和ニウワなる生れつきの人は、仁厚ジンコウなる方カタへは得手エなれども、やはらかなるは、少しはよはめなる所有ギホウて、義方ギホウのかたへはうすき事也。質直シツチヨクなる生れ付ツキの人は、義方ギホウの事は得手エテなれ共、仁愛ジンアイの方は不得手フエ也。此類カタクのごとく、人々の得たる徳トクにも、それぐの差別シヤベツアル有事也。かるがゆへに、聖賢セイケンの人をおしへ給タマふには、それかゝの得手エと不得手フエとを、よく推量ヲシ(ハ)カりて、すぎたるをば、これをおさえ、及ヲヨばざるをば、すゝめたてゝ、をのゝ一偏ペンに」(28・ウ)かたよらず、其徳トクむらなくおしわたる様ヨウに教ヲシへ給ふとみへたり。何事ナニシヤにても、其身ミ、其ミこゝろになし得たる所有ナラシユキヤウを徳トクといひ、人道ジンダウを身心シンシンによくたもちたるを有徳ユウトクといひ、其徳ミを猶ナラシユキヤウ執行ギヤウしてつみをさぬるを積徳セキトクといひ、人道ニウダウをのこる所なく積得ツミエたるを成徳セイトクの君子クンシと云。

従好談卷二終「(29・オ)

(かわひら としふみ・九州大学大学院准教授)

(むらかみ よしあき・九州大学大学院博士後期課程、

日本学術振興会特別研究員 DC1)